



卒業おめでとう —3年間を振り返って—

広島工業大学高等学校
教諭 楽市 政彦

はじめに

平成23年3月1日、本校の卒業式が挙行され、243名が卒業していきました。彼らの堂々とした姿を見ていると、学年主任として彼らに関わってきた3年間が思い起こされ、ホッとするとともに、一抹の寂しさが胸に去来しました。彼らは高校生活の3年間で本当に大きく成長しましたが、学年主任としてこの3年間を振り返ってみたいと思います。

学年団のテーマ

彼らが入学したのが平成20年4月のことでした。7クラス編成が決定し、学年団が結成されました。

3月中には学年会を開き、受け入れ態勢を整えていきました。そこでまずは、学年の目標を定めることにしました。

社会で通用する人間を育成する

高校生活は小学校からの初等中等教育の締めくくりです。高校卒業後は進路も多岐にわたり、すぐに、または近い将来社会人として生活をしていかなくてはなりません。社会では、学校生活ほど手とり足とりサポートや注意、助言をしてもらえることもなく、競争の中で動いていくことになるでしょう。そこで、この3年間で学生(こども)的な状態から、社会で生きていける大人になる必要があると考えました。



しかし入学直後は、まだまだ中学生の雰囲気を持っていますので、まずは高校生になり、その上で社会人として通用するための基本的な力を身につける必要があります。

基本的な生活習慣の確立

礼儀やマナーを身につける

人間関係を築く(出会いの奇跡)

この3点を高校生活の基本として生徒たちに伝えていこうとしました。入学した生徒たちには、オリエンテーション合宿から「大人」としての自覚を求めていくこととしました。

自分のことは自分で考えて行動し結果に対して責任をとる

当たり前のことは当たり前にする

集団には必ずルールが存在する

子ども扱されると煩わしく感じる頃です。大人の入り口にいることを生徒自身に認識させ、ただ、それは自身が成長していく必要性があり、厳しい世界であることも伝えました。

これらのことを実践していくには、学年団の意識統一が必要となります。学年で決めた事柄については、クラスによって判断基準を変えずに統一された指導をやりきることにしました。もちろん、担任の先生方の個性を教室内で十分に発揮してもらおうのですが、それぞれの担任が学年で定めた基準を共通認識として持つことによって生徒指導のブレをなくし、全員が同じ想いで関わろうと常に確認し合いました。そうすることで生徒の不公平感をなくし、指導に素直に従うように努めていきました。

「団」「チーム」として

毎日、クラスの生徒と向き合って指導するのは何と言っても担任の先生方です。クラス経営が時には上手くいかないこともあります。そのようなときとかく担任は一人で悩み、孤立感を感じるものですが、そこを孤立させないように、学年の意識として、常に「団」「チーム」で取り組むようにしていきました。

学年会では、まず冒頭に各クラスの現状を報告し合いました。細かな、気になる生徒などについて皆で様子を話すことで問題意識を共有し、今後の指導の在り方を探る、そして皆で生徒を見守り、声をかけ、学年の生徒をみんなで育てるように努めていきました。また担任団も日々の思いや悩みを話し合うことでお互いにサポートし合うようにしました。学年会では、活発に意見を出し合い、何かの提案がなされて、やろう!ということになると、即実行に移すといったフットワークの良さもありました。

タイムリーな学年集会

本校では、年間のLHR計画には学年集会はありません。しかし我々学年団は生徒の何らかの雰囲気の変化を感じた際には、時を逃さずに学年集会を開きました。全体認識を再確認し合い定着させるとともに、ダレ、ゆるみを引き締めて問題行動を未然に防ぐことを狙いとしました。大勢になると、なかなか落ち着かなくなる傾向がある年齢ですが、集団行動を徹底するように、始める前には必ず服装や隊列を整えさせ、集会の意義を生徒に語ることで、話を聞く態勢を作ってから行うようにしていきました。



担任の先生方が役割分担をして、落ち着いた雰囲気を整えていただいたおかげで、私も話をスムーズにすることができ、生徒たちもしっかりと話を聞いてくれました。また、教室に戻ってからも、担任から再度集会の意義を話してもらい、単発な行事ではなく継続的な指導に繋がっていったと思います。

盛り上がる行事

高校生活にメリハリが付いてきた生徒にとっては、体育祭やクラスマッチ、学校祭などの行事を楽しみにし、自分たちで盛り上げ、成功させようという機運が高まるようになりました。当然ながら好きなことをするだけでなく、ルールに則った中でどう楽しんでいくのかを工夫していくようになりました。特に3年次における行事では、全てにおいて、生徒自身が高校生活の思い出を刻むように楽しんでいました。これには、彼らの人間性の成長を学年団みんなで感じ、我々も行事と一緒に楽しんでいました。



高校生活も終わりが近づいてくると、多くの生徒から、「工大高校に来てよかった」「あっという間の3年間だった」「もう少しいたいなあ」といった声が聞こえるようになりました。我々にとっては、嬉しくもあり、そして近づいてくる卒業に寂しさを感じるようになりました。この頃の彼らとは気軽に軽口を言い合うようになりましたが、それは、馴れ合いになっているのではなく、礼儀を重んじながら信頼してお互いに認め合ったものであると思います。



感動的な卒業式

この度の卒業式は、本当に感動的な式でした。堂々とした入退場、呼名の際の元気な返事、代表者のきびきびとした証書の授与。そして何といっても、前生徒会長梶田君の答辞の素晴らしさでした。途中からは涙がならなくなった工大高校への熱い心こもった答辞は、保護者・教職員・そして、卒業生たちも涙が溢れるものでした。最後のクラスが退場する時には、彼ら自身が考えたようですが、保護者席に向かって、感謝の言葉とお礼をし、万雷の拍手の中で卒業式は終了しました。



その後、各クラスでの最後のHRがあり、保護者とともにクラス写真を撮影しました。式が始まった時には惜別の涙雨が静かに降り注いでいましたが、式が終わる頃には雨も上がり、天も彼らを祝福しているようでした。あちらこちらで、別れを惜しむ姿こそが、この3年間の集大成だったと思います。

おわりに

高校入学時から考えると、生徒たちは人間的に大きく成長したと思います。それにはまた、最初から一貫した学年の目標を追い求めた結果だと考えます。どうなれば社会で通用する人間になれるのか。今の自分は、社会で通用するようになっているのだろうか。こういったことを常に考えさせ、そこに学年団がチームとして関わっていくことが重要だと思います。そうすることで、少しずつ、しかし確実に生徒は成長し、本当の大人に近づいていくものだと思います。

最後になりますが、ここまで生徒たちが成長できたのは、校長先生をはじめとした、先生方、事務室の方々、保護者の方々、彼らに関わってくださった皆さまのご協力の賜物だと思います。とりわけ担任の先生方は、最後まで生徒を導いていただきましてありがとうございました。そして、卒業生のみんにはいい思い出をありがとうと伝えたいと思います。

本当に卒業おめでとう!

